

〔発言者〕 秋月辰一郎

〔発言年月日〕 1966 年

〔生年、被爆地、職業など〕 1916 年生まれ。長崎で被爆。医師。

〔内容〕

妹を葬ると、翌日は姉が髪の毛が抜ける。「死んでいった妹と全く同じ症状が出た。自分もきっと死ぬんだ」と妹の死体の上で泣いている女もいる。その姿を父親は悲しそうに見ている。自分も悪心、嘔吐がある。自分もやがて死ぬのだ——こうした絶望的な日々が、このあと四十日間も続いたのである。

私はこれを「死の同心円、魔の同心円」と心のなかで名づけた。今日は、あの家の線までの人が死んだ。翌日になると、その家より、百メートル上の家の人が死にそうになる。その円周は次第に広がってゆく。

〔注〕

原子爆弾に多くの医療関係者も傷つき、倒れる中で、爆心地近くに踏みとどまって患者の治療を続けた秋月辰一郎医師の手記からの抜粋。医師の目から、原子爆弾による放射線被害の恐ろしさを伝えることばである。

(『長崎原爆記』秋月辰一郎、弘文堂、1966 年所収)